



十五卷

十  
封  
名

291
7
1-15

額田於八額田淵ヨリ出

三河志十五

三河

清遠以香梅皓

八淵 倭名抄

新城 今仁保村アリ新田の

別ニ音便ニイハル名

明田 今同名村アリ

位賀 今伊分スアリ又伊分

谷村アリ

額田未だ其処迄ハ其今是

後領ニ分ケテ長ク有其中ニ額田千長アリ

其中ニ額田御アルニ後命

者ヤナリ

藤原 今馬込村アリ

六名 今六名村アリ

大野 今大井町アリ

驛家

額田郡御名部ニ

尾崎 八丁 肥名 上門 上門 上門

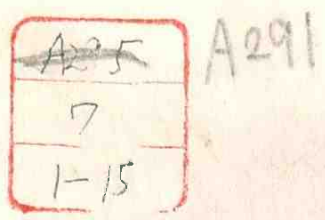
岩津 仁本 細川 東原 奥敷 丹坂

意田 奥田 八木 磯部 赤原 西原

菟田 大藏寺 鴨田 井口 百々 西河和

東河和 生野寺 駒立 大買 目新

柳 須山 加々手 布山 保久 一色



新井 中溪 小丸 豊平 兼国 涉

徳寛 伊賀 井田 柳徳 本郷 茂並

柳柳 杉平 田口 作坂田 板田 中畑 岩屋

井谷 大林 菅尾 柳原 山楠 アサフ 麻生

重福 切山 毛呂 柳田 竹丸 沃運 兼

キカケ 本郷 弄 寺平 柳平 鬼沢 古野

切紙 南沢 大河 徳寛 大心 土村

梶谷 徳下谷 三芳 柳岡 岩戸 西畑 今西巻 栗木 クリキ

三川堤云秦村村古松三所

三川 西米全ね世那信息  
長春弘治二年丙辰合我  
ア 柳原氏右中山西原  
付奉梨ノ粟生モ甲ヲ脱ラ  
津事又ト之之ヲ又弘治年  
合戦ト有ト日進合戦ト之工  
也ト云々

三川堤ニ酒井ズリ本名

酒井与助後ハ又ズリの名多  
ク世々酒井家ト  
以テ或付公上野村の城  
少ク家の中を多ク移住  
シテ又五ノ小別て内井  
即チ移住シタルものあり  
五ノ又別の名ハ打てし  
るを次依て移住シテ科  
各即チ移住シタルものあり  
五ノ又別の名ハ打てし  
るを次依て移住シテ科  
各即チ移住シタルものあり

友久 トモキウ 保母 兼平 遠生 柳吉 十波

櫻山 斤寄 富房 徳岡 高川 トウカハ 涉尻

二葉松を菓 柳原 牧平 下巻 大幡 上巻 市尾

柳地 山徳 柳原 兼平 萩 津溝

藤原 横原 岩地 徳岡 高川 柳原

大草 久留 長嶺 オウヤ 大谷 高川 兼

尾尻 杉野 兼平 市場 地令 兼川

是 平地 高田 小美 今ヲイ 丸山 高野

是を按テ酒井は世々一族ト云々



三河堤云十方町古田友泉平  
并八帝云集松云和田出書  
二更方云谷内村古田  
中古高橋云古田進寺村  
所謂十方村ハ

毛呂下富尾 松久保  
小楠 麻生 赤田 柳山  
田城 上下 各門 柳田 是之  
按二播名之と神人高木  
高木是傳之云云  
家田松尾松田八古  
村上下 松山 領也 永仁  
寺之内 高木 高木 佛  
生佛口 松比知 松之領  
之也 其次 三 松 松 松  
曰刊 松 松 松

彼揚子ト八公佛ノ名ト之  
夕リ松ト長松ト平松ト  
並師泰ノ父ハ松村師重ト  
有リ松惣持寺ノ領ナル

三河堤云谷木侯在馬ノ山  
今神ノ子田松尾松田友泉  
松田友泉 松田友泉 松田友泉  
松田友泉 松田友泉 松田友泉

大河 寺野 切歌 松井 古部  
蓮生 萬葉 生糸 池合 奈梨 栗木  
弓薄 須岡 岩戸 雲 友久 小坂  
保好 岡 丸山 丸平 三摩 乙面  
白楊 田口 松田 中細 岩屋  
赤井 赤井 經谷 一色 丸山 葉木  
柳村 中丸 新右 方谷 丸坊 宮石  
渡邊 日蔭 南川 九坊 宮石

貞殿 赤原 細川 仁木 八木 奥田  
丹波 江田 高橋 岩澤 磯部 松前  
阿和 東西 勝 赤田 岩屋  
白々 鴨田 井口 赤原 上里 大門  
日名 菟田 井田 細賀 徳地  
稻穂 小呂 洞 〇海道船村 八丁 藤  
欠 大平 生田 神波 彦川 山中  
南高

阿和 東西 勝 赤田 岩屋  
白々 鴨田 井口 赤原 上里 大門  
日名 菟田 井田 細賀 徳地  
稻穂 小呂 洞 〇海道船村 八丁 藤  
欠 大平 生田 神波 彦川 山中  
南高

自海道北三村里

茅室村史  
打井原に弟 少年紀  
三河堤川  
日進師  
家忠日記云江治二年二月  
九月松平右平亮  
車乘基左衛門上号  
三州日進城ヲ攻ム城を奥平  
久重の射出テ我々義春  
イニ討死ス云云  
三重松以新古城  
竹内秀重更山内角平ト  
之ヲ柳田ト遠レ九代組  
兼領ト不審  
武徳大國花に花 江治年  
西辰竹内右政君在又月  
三日松平右平亮義春  
各代トシテ西三代徳代ノ士  
ヲ率テ日進ノ城ヲ攻テ  
城を奥平久重出テ  
防キ我々下略

御和 萩 荻谷 深溝 山越 横落

惣田南北 大草 三乃 窪田 長瀬 坂邊

北鼻南長八幡三郎 三須 上地 六品 大谷 山細

馬頭北 善川 尾尻 沙泉寺 東谷 柳家

山徑 舞木 若松 針邊 板 柳根

元傍 宮地 法誓 六石カ 久後 山寺

以三白石八村 春夜此百格村三ノ上謂事以是

三河志

三河

渡邊政香輯録

額田郡部

高九百三拾石事谷

善徳町

内沃

森石

隨念寺領

百石

經乃寺領

水石

大泉寺領

三石事

沙石寺領

砂石

寶福寺領

三拾石事事谷

極樂寺領

胡方家祿ニ惣持尼寺  
ノ一世ヲ我々持乃師重之  
女尼ト成リ位ヲ下之リ  
持乃師泰光刑部丞光  
惣持寺ノ事附セシモノ  
ナラシ  
○ヨリ八名ノ内村古城祀  
次ニ奥平監物ト久三傷貞  
友江作ニ丙辰年元康公  
初陣 是之歳不審

或石三斗 甲午の谷

拾石

或拾石

或石五斗

或石三斗

或石

拾石

或石三斗 甲午の谷

遊傳寺領

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

遊傳寺領

推之石

或石三斗

八幡領

天王領

白山領

或石三斗

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

或石三斗 甲午の谷 或石三斗 甲午の谷

日傳千弟 出年記

● 月新古良補 田津之弟有傳 於味方系討死

松平之弟公親 出年記

國成權左衛門

日三 國成又老節子權左衛門之弟 國成  
系傳之弟村要

○ 久村 今島藩の地張手町重也

○ 貞藏 中多肥村古造貞政傳子系而討死 中多系八弟忠實

二男平八弟忠言 出年記

武村傳三忠貞 寛永系高田助 武家國盛系記三忠貞

梅三真公貞貞似者 何より武家系の徳とあり  
河系河村出久又三川水三徳

● 柴田家 出年記今詳有

白根八弟信 吳石扁云云 武村之弟人 何よりヤブミラノ殿 吳

石之次

松本善左衛門 日三

月堀作助 吳石扁云云

### 八町村

二 武村白根石之次 吳石扁云云

也

白石

大橋古伝

白石

老吉古伝





川崎古原浦 二重石云是傍に之 按是傍の石川傍に之也  
石中ノ下ノ馬也 川傍に之云是之石也  
大系左近衛 小嶋石海那中里村由之合身 自書海那

日名村 或日長

三石日名石年三

長濱

神社 或社部 石度之合考

中根 海那年重次 出書

下大門村

三石日名石年三

日

三石日名古墳 八叙大明神在村有之 按三石日名

上大門村

三石日名石年三

日

日

八石

大系石

七拾石

大系石

三石日名石年三

大系石

三石日名村 上の里あり

三石白松石二年八分

也

中石白松石二年五分

市領

白松石二年五分

伊賀八幡

石名四年五分五分

岩橋

岩津村

三石白松石二年八分

也

七石

西林院

白松石二年

物白石

或松石

西石

松石二年五分

光石

残石白石五分

長橋

石松 岩津七松之内云

按三石白松石二年八分云云 津石

以之因基云云 非也 七松云云 三石白松石

圖書卷親云云 中云云 後松石云云 或松石云云 是津石也

の城と松石云云 是津石也 仁徳天皇御宇 和云云 道

乃村之里云云 松石云云 赤松石云云 是津石也 乃村

正徳御家書より松平定宗の御書に上野守松平定宗の御書に  
云々御書の御書に松平定宗の御書に分る御書に  
是と世方に松平定宗の御書に

恭親王松平一ノ守の御書に松平定宗の御書に  
後代に松平定宗の御書に

東徳吉成記云々略其後勅書に御書に  
是より山崎守長に依る恭親王の御書に  
信光少海より信光の御書に

●松平和泉守信光之恭親王の御書也

御書端云信光公切札和泉守松平定宗の御書に

川之左衛門長保保久長良と為る松平定宗の御書に  
祥と云々松平定宗の御書に  
利平の御書に松平定宗の御書に  
是の御書に松平定宗の御書に  
平定守の御書に松平定宗の御書に  
是の御書に松平定宗の御書に

精勇竹谷松平定宗の御書に  
松平定宗の御書に  
松平定宗の御書に  
松平定宗の御書に  
松平定宗の御書に  
松平定宗の御書に

光親五男松平忠房が家傳十男松平修理亮親貞也

御系譜より一孝行の孝一川叔也

於之松平人ありて松平と因申の事と好く或る家傳遺一六  
世より一と遺一各故松平の家伝之の時或る族海若松  
親一治より松平之初めの時或る成長の以て一松平親貞の  
不の業に自ら足立一と一と傳き一と一と或る富と知信と一と  
少抽一松平の子孫と好く是の松平親貞を大感一富より松平子  
一と一<sup>中略</sup>松平の城一と一河前六代松平の子孫一と一  
一族海若松より一松平親貞の事一と一別一松平親貞の  
馬一松平一と一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一

雅く長亨二年は申七月廿三日終年云々といふ言はれ傳  
御系譜に松平より一松平親貞殿且松平親貞大傳定門といふ  
御系譜云々松平親貞の事一松平親貞の事一と一松平親貞  
の事一と一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一

武徳大成記に松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一  
松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一

親貞若嫡子長親君の事一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一  
二月年と一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一  
二年松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一  
松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一松平親貞の事一と一

海内を祀るに上略 期を以て國の軍兵を長教有る者一軍は  
東之の西士を今川のありと雖も徳川あり屬する者多し新  
左衛門ありて東之のありてと雖もは徳川ありて今川  
氏親ありて東之のありては徳川ありて今川ありて  
許教ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
と云きありて東之のありては徳川ありて今川ありて  
子息新九郎氏親ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
辛酉九月一夜中 言はれぬに徳川ありて今川ありて徳川ありて  
二連ありて保信ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて  
水徳川長教の令は長教ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて

長教ありて甲子ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて  
岩津の城ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて  
岩津ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
軍士七十人ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて  
進く申ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
い何方ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
者ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
の城ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
馬ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて  
早雲ありて今川ありて徳川ありて今川ありて徳川ありて今川ありて

今小押分とて一日城を打一一日は後備と防一と軍勢よ  
り知るとは依り智とるまんとまに軍に教をうらるあや  
今川勢をたんとくもたは不足強動と長秋の陣酒井  
左衛門兵衛前津兵衛合身あ七弟秋重并小中丞大保神京  
氣中あくと國を作り合能と守じて攻め今川勢と取合と  
敵と取合ひの行合津津御仕形の家之給也其の族横合と  
彼のりく敵早雲津津御仕形の家之給也其の族横合と  
今川勢と取合とて今川勢と取合とて今川勢と取合と  
て今川勢と取合とて今川勢と取合とて今川勢と取合と  
て今川勢と取合とて今川勢と取合とて今川勢と取合と

攻めり今川勢と取合とて今川勢と取合とて今川勢と取合と  
りて徳川勢進と討つと討つと討つと討つと討つと討つと  
矢橋川のあし掉結渡とて衆をうらると日と既と書くと  
終つて攻めるとやとやとやとやとやとやとやとやとやと  
**按**長親君授の智の今我場井田野之今魂野野稱号と書  
く井田村のりふぬ

**武徳大成記**云云也 伊勢新五郎長氏と軍相とてとて  
江戸一永正二年丙寅秋八月日之刻を回案向と大平川  
渡り云々並後略の後略記とて五年取遠ありと今考

同新島

當村西北あり今地を裏へ 松平源十郎頼朝

長兄少移り信光君の八男 南無菩薩云初岩原信光新島を獲り

後長兄城を獲り初岩原の城に守りて連くは信光也

と云ふ依此等と長兄少と長兄は信光也と云ふ殺老は信光也

松平之膳 岩原在城和信光君在在信光初岩原後

紀伊守光重

御至譜曰云矣中抄改宝位初城を西御潭に置り入道清海曰

因岩原城と無キ 信光元年 在久其子 潭心島 射相嗣信光

君下集相拒之終 和信光君と云信光光重と云子と云

是信光と云信光初岩原大州 信光と云信光と云松平

潭心島 光重と云信光名采金

松平信光 其嗣 信光 信光初岩原大州 信光と云信光と云

ト云 按三形系に信光 信光君信光

松平左衛門守家 口之 按三信光君の嫡男 信光初岩原

後左衛門又和信光と云

松平大炊物 信光 口之 按三信光君の七男 信光初岩原

元女方三男也 信光 口之 按三信光君の七男 信光初岩原

左衛門元心 五井 按信光君の嫡男 信光初岩原

松平左衛門 口之 或説云松平の祖和信光君元初目ト云

と云信光君同ト云信光君の嫡男 信光初岩原



又ハ兼之の子孫次第事正子孫小左進之云云ハ其ノ旨ヲ得ル左官  
ト載キテ○大給源次郎信忠之官名正信大給源次郎親長ノ事ナリ

法名 宗公ト号スルハ大給ノ下ニ記ス

● 松平雅樂助 出守

● 松平友九郎出生 日記

● 松平白清 出守 親忠の子 岩津源次郎後被理亮

法名一玉白清 按テ源次郎信忠ノ事正信大給源次郎親長ノ事ナリ

● 松平源九郎長勝 日記

○ 信光 和泉守 従五位下

守家 竹谷弥七郎 後右京亮

親忠 世良田左京亮藏人

昌龍 松平三郎 大中住人

興嗣 形原佐渡守 形原住人

光重 松平大膳 紀伊守 西郷澤正左門村園崎住人

光英 松平八郎右三門

親長 岩津太郎

兼元 大給源次郎 和泉守

長親 世良田三郎藏人 出守

親房 櫻井弥八郎 玄蕃助 内膳正信定養子

超誉 存平 信光明寺住持

親光 松平刑部丞

長家 安祥左馬次

神武創業錄一巻  
亦五日珀石海郡宮石  
松平外賀右三門兼清  
戰死天大給松平廣流  
也然此北戰死場傳  
亦十一之後人可考之云

元芳

五井弥三郎外記  
五井佳五井深溝之祖

張忠

東条右京亮  
甚太郎兼忠父

親則

長沢弥次郎源七郎  
備中守長沢佳

兼清

龍取源四郎  
外賀左門

光親

能見傳七郎次郎高  
能見佳

家勝

美作守

親正

修理亮

信重

松平弥五郎  
此外三十余人首之由

坊補鎌倉武鑑云

仁本太郎実國 足利家  
系三河

判官代義実長子  
源実國 仁本太郎

義俊 日又太郎

一族ノ梅樂方也ハ足利氏  
兼十位ノ一ノ千ノ餘終ニ  
足利の校官ト云フコト也  
のゆゑ

◎ 紋如地

大森半七

出立記

中根甚九弟出立 日次弟九弟

仁本村

高田九拾九石年弟各

長湯殿

長

仁本報後書義長

左書又史号伊勢二本

長將兵有リ初々其切之也

長澤彌吉仁本氏ノ領左方故ニ當村ヲ仁本森石見

長利高田判官義清・唐沢判官義実・仁本太郎實國

仁本太郎義俊・仁本太郎義継・仁本太郎高師義

仁木右衛門義勝三男義長より

長岡新義 出守紀伊今路より新義長の子仁木義人由由

春日井右衛門 川三

松平左衛門 出守紀伊今路新義長の子仁木義人由由

細川村

三三七石 石谷 石谷 石谷

松平義長領

石谷 出守田下之新在 細川義俊守頼春

細川源義季 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

坊補鎌倉義俊三云

細川 同

判官代義俊三男

源義季 細川二郎

義久 細川又三郎

家俊

俊氏

仁木とありて義俊の又或る方の  
の之を源の官領家とあり

◎ 致如北

陸奥義家 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

頼春より 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

下之通号常久足利家信領 判官義俊 判官義俊

判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

苗圃の石俣 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

凡足利家の時代三河細川右良一色河津も此地を由由と領せ

られし由由右良一色河津も此地を由由と領せ

松平目 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊 判官義俊

後して磐石の城と好い品傍の美和亭和常の兼之隆子  
松平之由日新由志隆日集之物松平林島今井加三坊  
極村在八弟号カ殺しく功あり

河所 根下 松平之由 和常 兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊

河所 上平三左衛門 城の日記分るなり

石彈子 雲根志隆 兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊  
兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊

栗原村

三百七石七斗七合

④

成合石

幾言九拾七石七斗七合

沙溪院領

松平總殿領

奥殿村

三百七石七斗七合

城 松平總殿領 兼之隆 日集 日新 林島 今井 加三 坊

の二宮總殿領は此の宮總殿領に兼次あり

武隆三云孫十一年より當利額三萬石二百石  
事傳加後那之信のり女又三月解意一

丹坂村

三百拾石五斗七升

松平領

志田村

三百拾石五斗九升

日

奥田村

三百拾石五斗八升

日

八木村

三百九拾石五斗六升

岩手領

磯部村

三百拾石五斗四升

日

東後前村

三ノ目拾三石三斗三升

長信領

長城 内及外は石見守村家長 惣領部は城在後河

首領三斗三升三合三勺三撮三粟

西後前村

三ノ目拾三石三斗三升三合

長城 松平右衛門次郎右馬頭兼左衛門右衛門

惣領是松平次郎右衛門重右衛門之重則より

○松平信光君 和泉守 九男 光親 松平傳七郎次郎左門能見住  
以能見為系号

重親 傳七郎 重則 左門阿知和住又 此人當城三兼領也 重長 松平右門西藏前  
ヲ領ス子孫仕官

菽田村

三ノ目拾三石八斗三合

長信領

榎井市右衛門 出立元

左樹寺村

三ノ子寺拾石平年

因

云石

石白身拾石平年

張石之石拾石平年

取道山之樹寺

寺領七百石

淨土佛燈系譜云 左樹寺年山勢美多之

海致録云 親忠云 勢美上人曰 下略

後同古礼云 親忠云 院在利安 法名西忠 下略 元新

寺之樹寺并海寺之其祠曰

左新鴨田の内並前より有

右後山寺に古年余為左樹寺西忠院中 後左樹寺

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

左の山寺は後河子七郎の遺徳に因りて中より為りたる

元禄二年丁巳七月廿五日 大流 西忠判

又云高忠行十之辰武門予<sup>日</sup>丁未是子後其初日

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一中陰ハ二十日位七日位迄は縁上親類ハ一泊<sup>日</sup>陳<sup>日</sup>と云ふ事<sup>田</sup>兼<sup>田</sup>兼

<sup>とハ内書</sup>十日位迄は縁上親類ハ一泊<sup>日</sup>陳<sup>日</sup>と云ふ事<sup>田</sup>兼<sup>田</sup>兼

因<sup>日</sup>高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

此高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一因高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

<sup>下</sup>高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一七年ハはく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり

一高忠行十ははく<sup>日</sup>利左衛門と云ふ事なり



平三郎仁右衛門

一 ありて形中は長子二十の中位に承りて居りて先づの意を承りて後  
此子た<sup>小太</sup>一人に養育者多し中位に承りて居りて中位に承りて居り

此元九年申申申申申 為右在判

三樹寺

此形徳とて樹寺とて云ひたり

元元年記流日永祿元年云云 以平略

按書と鴨田と稱するハ親徳公の建之長公の山内道直  
ト云後之神君也其時今之地は中書と建之長公の  
堂の地ハ鴨田村の地ハ山内之樹寺の地ハ徳之鴨田と

稱する也

日三樹寺村 名ふ三勢在馬 此元記

杉平長中郎

井、日村

三つ目森公右衛門長中郎 此元記

古殿 在殿之納言 此元記云々

日中將 日三

中根喜彦 日三

井口左馬助 此元記云親徳公の子杉平長中郎云

又高橋城代在馬女云持親忠君在七男安祥の城也  
天文九年庚子二月曾安祥城藏田信秀攻討長家家重能  
羽音自死久 吾安祥下之出久又三川水ニ垂

トウド  
百々村

二の百々村石の年成

百々城 山形本マ 吉松長吉

長徳

武家傳云吉の者江島國生居流而吉の弟定俊之孫也亦  
世在江島定俊好世之苗裔有吉の孫長吉者信在吉類  
百々村

武家傳書記云青の孫之孫之殿冠之苗裔有吉の孫  
忠門の之人云信三信久ト云

按武家傳云吉長吉有吉の孫長吉忠門以孫久ト云

古傳記云百々村吉の氏代々信三ト云信三忠門以孫  
孫孫不書追之者 **武家傳** 世平氏ト云不實

武家傳之傳記云元龜二年春三月十日高直長助卿元龜  
一長直長改云也凡今云長直長直長直長直長直長直長  
平阿知和吉長村家入事云百々村分の長直長直長直長  
は云々の也 神君の命を云々百々村本欄を辨し物見云宛  
新之傳書と傳云おろろ云云信三一換退教云

● 同大膳 先祖ヨリ在城

● 大膳忠成 後常陸守 又播磨守 従五位下

初之御君奉仕ス可成極端依奉武官顯格中天安年

小園東津守専忠信守云 同年園東津守國守府君

佐間守右衛門 尚書院經略守任守

慶長中平儀皇孫依奉又園守弟之儀被切アリ

同十年 台徳院御座守府水野道清信守治定益新所

要定赤川守之儀 同利地守伊豆守 同清路守村之守物也上老

依奉同中八年冬五月十日江戸に奉入

如生祀云若村守喜山守守多出生治之云世女更敬

元徳二年四月七日皇孫金成之御子福右左衛門三郎中  
早水勢之儀 討死云是後守村守由緒依奉之

○ 忠門 青山喜大夫 忠成 青山大膳 常陸守 播磨守

忠俊 藤藏 藤五郎 伯耆守 文禄元年 台徳公ノ於御前

慶長中平儀皇孫依奉又園守弟之儀被切アリ

天和元年大坂再戦之時首白格七級ヲ討取

日中守守右衛門守喜山守守多出生治之云世女更敬

寛永三年十月有故御座守府水野道清信守治定益新所

御本守村配流 同平年中月十有於配不為死守守守守

本邦史記三八記流  
守守守守守守守

宗俊 因幡守 内膳正 父上二所配流程ナリ被召出テ三子ヲ賜

忠長 卿遠流跡駿河御城在昔

於駿河御城代之初ニ其後位乃少宝城ニ方石ヲ賜  
寛永三年九月十九日方石ヲ賜大坂御城代ニ被令下  
近至二年六月十日所及乃方石分命之方石ニテ  
遠別所程儀拜領相至七年二月十日有卒七年三月

忠親

和泉守延宝七年父家督  
ヲ賜依多病父忠重ヲ奉  
願養子トシテ家督ヲ讓

忠重

下野守

忠重

喜大夫  
兄忠親ノ養子トナル

忠義

筑後守後忠実ニ改  
兄忠重ヲ讓ヲ受テ家督ヲ  
継トシテ忠重ノ実子成長  
ニ依テ家督ヲ讓リ早ク隱居シ

忠義

左二門  
兄忠重ノ養子

後春

冬之助因幡守忠重讓リテ  
受テ家督ヲ自是如武鑑

恭重

朝比奈弥太郎朝比奈也三門  
養子 紀元任

幸利

大膳亮父家督自是如武鑑

幸成

雅樂次大藏少輔從四位下侍從  
自幼台徳公奉仕寛永二年寅  
三月御元職撰之居寄五方名賜

幸通

丹後守 明幸 備後守

通直

天方備後守  
天方山城守通興養子

以下畧悉ク三川水ニ出ス

只傳曰今書村之庄及之志心其爲ト是之代々長也彼青山  
氏ノ嫡家由也仍テ志心候通直ノ子長爲後代ニ出ル  
備三重ノ志心ノ子ト云

池田友物

志心云在更上一新直傳チヤク死

志木少年

リ

志野少年

志心

西河和村

三式石名寺系第廿合

長傳領

瓦城 松平在門 傳系在初也生元云今有跡

東谷孫系 生元云 依忠君南系之由申傳之

有神社 或社部云云

東河和村

三式石名寺系第廿合

長傳領

生福寺

三式石名寺系

也

三式石名寺系

生福寺領

殘三式石名寺系

松平寺領

大基惣三場 寺元

門 為屋高 川

門 云云 川

駒之村

三〇〇拾七石七斗

長濱

大買村

大谷ガイ村

三〇〇拾石七斗七合

長濱

日新村

一日陰

三〇〇石七斗

松平島物領

渡邊津村

ワタナベ

三〇〇拾石七斗

長濱

柳村

三〇〇拾石七斗

日

波山村

三〇〇拾石七斗七合

日

三〇三拾石

加乃木村

イナギ

長瀬

加乃木村

三〇三拾石七年

日

保久村

三〇三拾石七年

松平

長瀬

中下長瀬 信之公に給て改申付長瀬新なる所

長瀬澤宮の改修され新なる所とす

● 日中第一徳寺

此寺は三ノ下一徳寺とあり 改修する 此寺は此

一色村

三〇三拾石

長瀬

新井村

三〇三拾石七年

日

中法久村

三〇三拾石

日

小丸村

三十七拾貳石

長湯領

安房村

三十四拾石七斗七升

日

若河村

三十三拾石貳斗貳升

日

涉村

三十三拾石貳斗貳升

日

東松石

万松寺領

四石拾貳石

涉山寺領

殘三石拾石七斗七升

長湯領



廣海港二

松平徳兵衛

徳見村

右陽子浦を徳兵衛と入  
道及有十八の子治家も  
利を親とす務め老親

二のり石

(内)

徳兵衛に頼りて  
千子孫徳之の松平と申  
申しり之親の嗣後

白石

松平徳兵衛

耐重親

白石

松平徳兵衛

実六のあむは老親

白石

松平徳兵衛

徳兵衛ありて

白石

松平徳兵衛

申すは此の如く

白石

松平徳兵衛

残る白石

松平徳兵衛

松平徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

徳川の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

百城

松平次郎右衛門重吉

廣海港二徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

松平徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

松平徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

松平徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く

松平徳兵衛の如く申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く  
申すは此の如く



創業錄 二卷

元祿元年戊午二月大十日  
松平傳七弟重親卒不

野見ノ松平光親子也  
其子少郎右馬重直家

留ヲ賜フ

同 二卷 額田郡野見松

平次希右馬重直痛稱

傳一節正利加南郡東谷

ノ地是傳ニ於テ宅地賜

是正利父重昌清水

推之助ヲ讓リテ之遺跡

ナリト云

清水推之助為遺跡野見

傳一履傳重直職ノ分於

東谷為父父并是傳必及

一ノ所不之有也遠傳但女

城福田分取改多分守對

者也仍為後日如傳

形傳三年癸亥二月日

後乃傳一弟及 弟人元象

忠綱

新助領言六浦邊遠之平日卿

親正

新助依鉤命 仕頼房卿

親次

松平清直門

重弘

鈴木權兵衛在故母傳繼子鈴木御旗本信實

親昌

松平

昌利

松平傳左門

重貞

松平半弥般若之助 寺部合戰討死父 義元感懷賜

重直

市正丹波守實小松原木政ノ男 根及三田城四方石賜

重勝

越前守大隅守 傳在前

重頼

市正丹波守後改英親 正保三年豐州木附城三方石賜 自是如武鑑

重之

丹後守元和八年壬戌羽山 蜀石賜其後再獲復賀

重永

圖書三千石分知

重長

淡路守

勝房

美濃守 有故藝居

直政

兵庫頭三千石分知 赤三川船出

重則

大隅守

重政

玄蕃頭

重利

忠左門玄蕃頭 寛文二年壬寅二万石石 賜

勝隆

出雲守寛永十六年己卯總兵 佐賀城一万五千石賜大坂西役 軍功多シ

忠勝

修理亮寺社奉行ノ勤ニ在故貞享 元年奥及會津配流

松平權兵衛

出生紀

同 津右馬

同上

石川或部

同上

世傳一弟昌利ハ父在左馬重 昌永祿三年庚申尾羽知 多郡九根ヲ殺シ我死シ 孤獨ニシテ法乃氏下改メ 云松平重昌何故ニ法乃 權之助力送死シ父九ノ 傳承之

・山林七代史 〇〇〇

・金田惣八 〇〇〇

廣徳公を仕立し奉るや大神者少少に離別し討たて奉  
送り有と云

海防之紀 正徳九年金田惣八安部に布高侍五斗作と為各  
六斗と云しは遠く安部の信長と其子と為たり白隠や  
伊集と早也が安部と一是も傳り云

家忠日記 正徳九年改訂金田とあり 正徳九年之野の國書監  
と改めり討金田討死次 二十一年

武徳之國紀 正徳之降金田宗八弟宗祐根其弟高教

死とあり 家忠日記同宗

・野急左衛門 〇〇〇

・杉心新五郎 〇〇〇

・乙斐守中兵衛

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
海防之紀 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

家忠日記 正徳九年正月一日 宗六 大神君の奴僕乙斐守中  
上之者より早後ノ者より 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
宗六の代官職 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
乙斐守中 野急左衛門 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
乙斐守中 野急左衛門 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

八幡海文志と書し一巻に於て三節信康と云るは信之は象  
 之加へ海宮神と稱し是を云く十捕之あり一人其地を討つ際係  
 之故形は云々とあり一は我の死を乞ふ進み居る是信の吾も其地集り  
 是を殺して吾首を信に納むと云谷甚高の道に金領之服被り  
 是夜生捕りて人を殺し其血を飲みけり二夜の城を奪取す甲  
 兵を野分の中人其夜海宮神と云るを信と稱し指し其地を攻  
 り其地を奪取す遠く其地を奪取し其地を奪取す其地を奪取す  
 六甲中野に竹藩と云る是を載し七日に遠く其地を奪取す  
 子信其人と捕りて其地を奪取す其地を奪取す其地を奪取す  
 天元年記に竹藩と云る信康の事あり其地を奪取す其地を奪取す

少くは信之の事と云

鬼島村

二のちのち拾七石七事九事定合

也

或る石

残る或る石拾七石七事九事定合

八幡殿

是御領

自撰 杉平志神守康安

杉平志神守康安の孫也

寛永三年壬午初春信康石屋を復たす其地を神守奉仕し

依幼依幼命仕之弟位康君 天正五年後抄遂目合致之  
内進之<sup>ハツク</sup>而新討於此等者爲馬也 此等者爲馬而退來安  
進之新居於此等指物

同十八年國東所入國三府奉仕 古德公是依幼命之弟  
元和九年四月五日卒之享九氣 治右道白初言於伊賀之位  
人也云

井田村 伊田

三石白岩谷石之平合 中  
古蹟 酒井左馬尉康忠 文德二壬戌年二月十日卒

左馬入道淨賢の子也 初少弟又十弟 天 号之長親君奉仕  
吉野之在城云

是左馬尉康忠次 初少弟井田御信 清康君仕御舞之  
彼成康忠君之御者之歷仕云 永祿七年三月廿四日少尔  
肥前守と遂く彼城を石と忠次 錫子也 是神君巨城  
地と錫子の始也 凡之御者我御不致也 凡之御者有功御法  
川の新謂之長後入道之号一智

寛永五年云云 神君亦秀吉和性而御所造次 供奉之秀  
吉忠次 於系御地 極井田之 並知以五千石 江右之内  
慶長五年十月廿八日於都極井田受奉 奉家法名三月縁

同是下流有恒城 梅野酒井の事不也但徳次男富岡彌  
宗次も徳宗確永の城を賜ふ事不也徳宗と信光の事不  
信光と謂もかゝ徳次の子男初年幼弟之恒と云ふは是と  
遠流の追考

**出守**記云其父酒井が豊左の城を巡り上野に籠城  
左馬村を城と成る由

一月十年 **出守**記云今十年豊松と云 豊松在

**三石**古境記云酒井左馬村法名浄賢在士天文四年丙申  
六月八日卒

是十年康忠之妻二人は伊田の城を破るの事あり云

徳左馬村氏忠法名 浄賢モ當所の城を破る之をり

又此十年と云ハ康忠幼在徳左馬村小十年と云ハ此年の  
徳宗康忠と此十年といふ人今在るが并其年に出

○徳河親氏君

常三郎

廣親

坂井左四郎親氏境郷御滞留中左右兩  
侍カキ三郎泰親君御代ニ為臣代々御當家

家忠

酒井左四郎  
泰親三郎

信親

酒井左四郎  
信光君侍

氏忠

小五郎俊左門尉入道  
愚云浄賢 親忠君長親  
君奉仕 天文五年四月廿平  
七十五歳

康忠

小五郎平左門尉  
井田城主

忠次

小五郎左門尉  
井田城主

親重

左四郎  
是雅樂頭正親公ノ子

忠直 將監

家次

小五郎 宮内大輔 左門尉 大神君奉仕  
三以吉田城居任天守八年下総國碓氷城三万石  
ヲ賜 慶長九年上次高崎城五万石ヲ賜  
元和元年十二月敵後三田城十萬石ヲ賜之  
其後依我功ヤ 日守年三月十四日卒 卒二家  
法名宗慶

康復

本多維殿次  
本多忠次養子

忠勝

宮内大輔四品 慶長之和の役借奉ス  
元和五年三月轉言 移任於松代城  
日八年八月又移任於石川郡湯十三万石  
寛永五年六月加受肥後守有罪改配  
唐内使忠勝護之時賜二千石都立時  
十四万石トナル

信之

小笠原左門佐  
小笠原信嶺養子

久恒

松平甚三郎  
福金松平三郎次郎  
為智養子後忠勝  
臣トナル

真次

右近大夫

忠當

摸津守從四位下

忠重

長門守  
祖母養子

忠植

大学及武鑑忠恒  
台徳院奉仕別賜米地

女

於風松平源三郎康復  
ト二人今川家為質被  
遣如三今川氏真駿  
府没落ノ時預人三  
浦守ト云者右三今  
携ヲ越甲府軟信玄  
其後康復八甲府ヲ  
逃出テ三又三歸其  
後於風八從武田飯  
時松平外記伊昌三  
令嫁王ヲ

勝吉

大膳

忠豫

百見守從五位下  
此未當時羽衣杉山  
三万石ヲ領

了次

玄米田

米女

忠勝ノ臣  
トナル

忠解

備前守

民部

同断

忠義

左門尉四品  
自是武鑑ノ如シ



井田村合戦

今八魂野之号次

後白河院之建徳二年正月七日是利成政が軍勢を依之  
 天下物強しと詔由多末松の次徳川に白河を徳川に奉免就徳  
 軍勢より率し一宮井田の御下出陣の事大就徳叔父松平定房  
 佐原其合身遠江守就徳口出陣の事大就徳叔父松平定房  
 久就徳志合身松平定房先守口合身定房昌徳口合身松平  
 依河守無嗣長徳松平定房元光重田八年重田守之英田海部  
 之芳野見松平定房在野見就徳口合身元光重田同修徳也就徳  
 之子是名長徳大郎就徳長口松平定房定房元光徳川守定房  
 長就徳其弟長徳定房長徳守長徳守長徳守長徳守長徳守長徳守

親重初多八弟守時合身平定房初林長初林長初林長初林長  
 定直柳定直守時清長嫡子孫守時長政其弟由雲松集  
 其勢於合八口守時守時守時守時守時守時守時守時守時  
 井田の御下出陣の事大就徳叔父松平定房元光重田同修徳也就徳  
 乃く尾張守松平定房守時守時守時守時守時守時守時守時  
 之捨之級とゆふ一宮井田村合戦の事大就徳叔父松平定房  
 腸間守時守時守時守時守時守時守時守時守時守時守時  
 井田御下出陣の事大就徳叔父松平定房元光重田同修徳也就徳  
 叫喚の多々喧し其弟長徳守時守時守時守時守時守時守時  
 河出陣の事大就徳叔父松平定房元光重田同修徳也就徳

予予之孫と必方今の世にまゝとてや大樹ちの三人親徳にお後  
あり十月十日に言傳と書けり有るまゝ後時侯の夢靜まり  
しと思後あり其徳を子孫傳ちておありし一木の怪異は  
小井園世とを以ててとてとてとてとてとてとてとてとてとて

三河二葉抄曰く人の言に徳の志三年を母とて三年此銘を  
いかに又三河八代集に其竹の歌に伊保完如き事本中ね  
りあり八草の歌次ありと野河に於て常長流と改んて  
昔田中の中へ金取とての用と取きとて其竹尾にあり也

武徳の國祀云の元三年の十月上野城を討つ時常長流と  
於本日の事本抄に中條河原の河原の城に之を記す也  
○伊ノ保

八草城を討つ時常長流とて其竹尾にあり也  
攻んとゆきたり親忠君とてそのの歌に之を記す也  
多くと思ふ嫡子長親君に其竹尾の事本抄に  
之を記す也

三河八代記云長親君の首に其徳を傳ちて其竹尾にあり也  
近道本抄に其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に  
能く入る所依りて伊勢新五郎とて其竹尾にあり也  
其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に  
既中強向とて其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に  
今抄に其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に其竹尾の事本抄に

と押す形は其の谷中打鼓音等の押は皮を連中手は保伊不為  
の形の一教ともしく甲山より右を其の田と通して之樹に押す  
と年月<sup>法</sup>思智はまると岩岸の城と稻麻竹草のしくお困  
しく攻易きう城申すは其の村子及びまきれく之間を押  
すきながら<sup>弦</sup>陰気<sup>弦</sup>のまきれと押さるけ様とあたまを  
足運と村拂をまきれを程小鼓傳方への間のみまきれを  
のきりこの高の同宿は其の押軸を息を傳へ地を流しかと  
まきれがわがら<sup>法</sup>節とまきれを押さるけ様とあたまを  
者古<sup>法</sup>あたまとあたまをまきれを押さるけ様とあたまを  
うん<sup>法</sup>とまきれを押さるけ様の押さるけ様のあたまをまきれを

とけ其夫倉とあたまを推さるけ様とあたまを推さるけ様とのあま  
様のあたまはあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを  
彼のま倉のあたまを一押しあたまを推さるけ様のあたまを推さる  
い押しあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さる  
おくらあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さる  
印と押しあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さ  
おくらあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さる  
あたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様の  
しくよとあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さ  
押さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを推さるけ様のあたまを





勢平に同封しつて討つる勢を知らずしとて度々井田の  
東に懸る山を以て私しきるごとくわつて平地に海に注ぐの波  
と障りし事あるを思ふに際しつて却て海に注ぐ事あり  
御合よまは梅酸の陽謀かつておぼえし事をいひたり  
味方ハ日名院の院は旗を揮ふ勢と一而して集むひつたり  
なつてぬ初め舟の働とわつたりとてとてとてとてとてとてとて  
らぬとわつたりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
折悪ぬとわつたりとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
その他中世とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
和泉の山に陣とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

の早のみ〜井田のおもひはつら東への向ひつて一は中世とて  
此今の軍の判陣とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
つり〜身目とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
田原の山とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
らん〜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
ゆ〜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
るおもひとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
新九郎よ山に板とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

退きりて程小生地の在りたるは、初傳の舞火  
一夜の清光天多事月影とて、秋の夜半小鏡をくしりて、  
追掛くし、程小生と名をとりて、追程小生田を川と追  
の中より、追程小生と名をとりて、又なまじくも、前編より、  
長親公、今夜の今夜の百羽とて、おとせの正利運自、  
く、安城の城を、く、く、く、

**後**同記云、程小生、  
く、清光公の御祖、又、徳川公、長親公、  
は、今、る、事、は、右、の、事、を、  
く、く、く、く、く、く、

是、程小生、  
定、也、  
偏、  
い、  
は、  
の、  
あ、  
兵、  
の、  
ま、

指直一仙の成爲初少あり清康の清合弟磨と  
く初もまた仙の成爲の成りて一軍とす一二年の  
廻り松平系人信孝同夥敵の領より弟系飛来と  
たむとて軍兵僅小百金湯と打きて十室中押出  
たむと勢と二百より伊はのり陣と張る織田方は  
遠よりて敵の陣の中よりて馳散して持てて敵を  
ゆるゆると及後と三度軍法と定め次思ひよ馳  
あつたるにわ勢より兵討死とおとした付も多き  
追討も多き弟思ひよとて一軍とす一軍とす後  
軍の軍云とてとてとてとてとてとてとてとてとて

成敗八弟正業八弟基三弟詮重村長良の具置保石  
川道右馬惟宗其弟村青のりりりりりりりりりり  
一六酒井一宗とて保一宗柳宗の弟とて勢馳りて  
あつたるに旋回旋のりりりりりりりりりりりりりり  
勢とゆるゆると及後と三度軍法と定め次思ひよ馳  
あつたるにわ勢より兵討死とおとした付も多き  
追討も多き弟思ひよとて一軍とす一軍とす後  
軍の軍云とてとてとてとてとてとてとてとてとて



為清子内中守忠實 是は非や 林友也長政林村新義  
安祥に死  
らむ互近正長其年三并正富其心も題一の侍官兼  
人討死忘らるる云

右六段の歌集方討死の軍侍少人堀小堀由信侍也

**東徳成成記** 二巻

天文三年十月信長は徳川相集り八ヶ岳を掃討す徳川探り侍  
田郷小打也清康君國に改陣焉と請きへ徳川と誓く  
大時之軍皆去つてあまき其方の侍らあまきと討  
たへ大捷を得しむるに徳川の方と誓い軍もあまきと討  
信長の兵もあまきと誓い徳川の方と誓い軍もあまきと討

軍級を斬獲し殲る敵兵降伏して書信を賜ふに徳川は國  
て其心とあまきと誓い云家忠日記曰云

**東徳成成記** 二巻

守山變に群臣變を後へて是侍也

安部を斬り侍也右を討けり通を聞くと其勢も日進  
希敵軍の志も其又何を請敵を乞ふんや迷に其勢を退  
擲く刑殺を加へ初君と書信を賜ふに徳川は國  
に信國は其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も  
卒く其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も  
そのついで守山打也初殺せん云一土あり進めり敵も  
我の家も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も其勢も

市のうら孤城と云うに檜とありんふの軍と野の別と我  
中島自を以てせんはたすといふは信長と云うといひて松平  
兼秀を將とて一騎士八百伊田卿とてはせり信長は  
兵と二軍ありて中島の路に軍路ありて路にありて我軍  
八百と云ふありて事あり打向ふ軍中忽ち信長伊賀の幅  
の初より白羽の矢鳴りて我軍は入るに我軍は奇揚とあり  
神の由有とて云ふ事ありとて一騎士三百二軍一討つて  
揚とて雷と定ぬるに我軍と也とありて合きり松村新六  
西軍ありて殉死ありて我軍は入るに松村自死ありて  
止めり寡兵とて事ありとて一騎士の我を以てて我軍利と

けりて暫くして我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
に我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
小島ありて一騎士三百二軍一討つて  
半あり信長は西軍は兵の術とて是と列とありて中島の進  
に我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
之術ありて入るに松村自死ありて我軍利と急  
是とて我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
とて松村自死ありて我軍は入るに松村自死ありて我軍利と急  
信長は西軍は兵の術とて是と列とありて中島の進

我々和略の始人にして我々の計謀を思ふに敬服する云  
とも其の功績の我々の功績に及ばざる者又我々の御  
敗を悔むに及ばざる者人を知るに我々の功績に及ば  
ざる者他川と謂ふは其の功績に及ばざる者我々の功  
績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に  
及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ば  
ざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる  
者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者

又二夜日村嗣君猶も徳あり軍を備へて我々の功績に  
及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ば  
ざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる  
者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者

徳者として其の功績に及ばざる者我々の功績に及ば  
ざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる  
者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者  
我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の  
功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に  
及ばざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ば  
ざる者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる  
者我々の功績に及ばざる者我々の功績に及ばざる者

稻熊村

二〇〇〇年九月九日  
神社 或社於此有之  
松平重政

大井野村

三石白倉石分家

長傳領

古殿 常田左京門前長傳寺元 長傳行書馬下今傳り

新重村

三石白倉石分家

長傳領

箱柳村

三川堤ハクヤキ白柳

三石白倉石

長傳領

古殿 中根肥後守 寺元云 中根長傳書殿之祖

中根町市 若子孫今長傳に存り 日深第 寺元云 今傳り

日長傳守

中村惣長馬 日長 永田左衛門馬 日長

松乃村

小呂

三石白倉石分家

長傳領

古殿 中根新長馬

田島村

三石白倉石分家

司馬文

中根七九系

並申根意

板田村

板村

三の八拾九石三斗八升

●五郎正希三郎 出立記云 古籠より

中細村

三の八拾九石三斗八升

岩屋村

三の八拾九石三斗八升

丸機

長岡田石戸

岩屋大格 恭祝公討之

三河村記云 徳子より須賀平より老成の市場より

津島山城より出く世遷りて懐く山中七石里 郭外より

事あり 其地錫よりなるに多 須賀平より 須賀平より 須賀平より

徳元之殘者也 岩屋大格 須賀平より 須賀平より 須賀平より

此を頼りて 出立より 恭祝公討之 須賀平より 須賀平より

三河村記云 徳子より 須賀平より 須賀平より 須賀平より

三河村記云 徳子より 須賀平より 須賀平より 須賀平より



路ありて小庭のりうを指達方と云ひ妻子は指殺し  
腹を切ると云きうう即ち地を固くけ田の底派の中よ  
此の世首殺多く討とう此の世と云て返さるる

一 後天師孝直の 岩倉村を住居と云るに  
重子豊久秀く加藤新右衛門村出り

子見小妻在馬

遠別城川を戦ふ時新右衛門兼市居居頼と討死す

徳吉之田子孫を尾張の春は

井谷村

この白平拾五石半八年

尾宿領

古久浦 某田七九石重茂

黒石扁之某田七九石重茂と云ふは  
くさく二夜小重と云ふは  
中権小七九石と云ふは  
此の世首殺多く討とう此の世と云て返さるる

大森村

この白平拾五石半八年

松平重頼

三ノ石村 イサケ尾 或富尾

三ノ石拾石年

松平之殿領

**萩** 萩野島之浦

桃之保村

三ノ石拾石年

長保領

小楠村

三ノ石拾石年

曰

麻生村

三ノ石拾石年

曰

**萩** 神代ノ時代麻生南在也 天野浦 中山七名之領

**三ノ石** 代記云神代西村中道北たけのりてはたけ

三ノ石ノ石有るを松平と打之ぬて山谷を越るの麻生

目録物也 萩編中打之ぬの神とてはたけをたけはるの城を

要害相交挿して修初も亦うたててはたけをたけはる

の神と名差の碑打の上子もたけをたけはるの神とてはたけ

を修初も亦うたててはたけをたけはるの神とてはたけ

はたけをたけはるの神とてはたけをたけはるの神とてはたけ





切山村

三谷石屋平八七合

長信領

上ヶ倉村 日蓮師上毛呂

三谷石屋平八合

日

古城 大山市系

按此古城地不審之遺蹟初平昌村の古牌石村別在古山在  
初年今古田江津三志の氏元者治長也上三下又此古城  
長康治政後上毛酒造初平昌村領石屋平八合長康治政元  
初年平八合長村善持所の系初平昌村領石屋平八合

按此古城地不審之遺蹟初平昌村の古牌石村別在古山在

初年今古田江津三志の氏元者治長也上三下又此古城  
長康治政後上毛酒造初平昌村領石屋平八合長康治政元  
初年平八合長村善持所の系初平昌村領石屋平八合

下ヶ倉村 毛呂

三谷石屋平八合

長信領

名之内村

三谷石屋平八合

是ハ御帳村名照る可三ノの事也  
初一後人の考と云ふハ名之内村ニナリ

柳田村

三〇〇拾石五斗

松平屋

一藏 親氏（二百廿） 山内氏（二百廿） 松平氏（二百廿）

一橋山（二百廿） 次行（二百廿） 松平氏（二百廿）

行々村 河津行次連上り 松平考一 行次連上り

三〇〇拾石五斗

松平屋

皇井村

三〇〇拾石五斗

同

本野村

三〇〇拾石五斗

松平屋

平井村

三〇〇拾石五斗

松平屋

寺本村

三〇〇拾石五斗

松平屋

板平村

三ノ目 板平石 七年七月九日

日

申日 板平石 七年七月九日

申日 板平石 七年七月九日

板平石 七年七月九日

板平石 七年七月九日

鬼法村 足次

三ノ目 板平石 七年七月九日

板平石 七年七月九日

寺野村

三ノ目 板平石 七年七月九日

寺野村

切籠村

三ノ目 板平石 七年七月九日

同

南江村 南頂山

三ノ目 板平石 七年七月九日

同

古河村

三ノ目 板平石 七年七月九日

同

長井

長井 依治三場

長井 依治三場

竹園 五葉草 熊谷 武蔵野 長井 依治三場 長井 依治三場

法皇村

イ法味

三ノ倉石之井

長徳鎮

中根在之場

山ノ元ノ跡也

大山村

三ノ倉石

日

大村

三ノ倉石之井

日

三ノ倉石

山ノ元ノ跡也

三ノ倉石 西徳村

足田十左衛門 出せ凡

飯沼大村

或ハ枕也

三ノ倉石之井

長徳鎮

三ノ倉石

山ノ元ノ跡也

三ノ倉石之井

三ノ倉石

三ノ倉石之井

日

三ノ倉石之井

三ノ倉石之井

三ノ倉石之井

河内村

三ノ宮白土谷石第九中谷

松平大膳大夫 山形 今河内

岩村 在岩屋村下記不可合考

三ノ宮谷石第十中谷

玉野 在岩屋領

西畑村 西畑村

三ノ宮谷石第十一中谷

因

栗本村聖洞寺

寺院并後曰春生山聖洞

寺之縁取和年中軍基

慶運江以濱嶋ヨリ當國

本願田郡中山庄聖山蘇

至云宇建立大禮那近

蘇作之右邊奉仕

慶運云當村若任堂燒矣

分天文年中近及一書

造之御泰保苗國領副

御御知行付位持慶林

御意入寺地山林敷茶

細波下之入寺地年

貢地成

白石

後三ノ宮石第十一中谷

所領

伊賀八幡領

栗本村

三ノ宮谷石第十一中谷

岩屋領

友久村

三ノ宮谷石第十一中谷

日

今重令在奥 山形 今河内

保奴村

三石路或石

松葉山麓

生平村

三石路或石

左保長倉領

小栗長倉

蓮生村

三石路或石

清田島領

清田島

官簿傳記曰其領額田那極井中村三石路或石極井寺之真之寺アリ白山出之邊ヲ淨福ニテ駿州  
今川殿ノ邊ノ許沼ケルカ亦藤氏年二月氏真牛久保城ニ對陣ノ刻記文出サレケリ

白山先達事

極井寺村

三石路或石

岩谷八石

極井寺

三石路或石

岩谷八石

極井寺

三石路或石保領中在之引  
東白山先達十身以來  
財賀寺中掠奪集取之  
糸先年双方逐野載之  
極井中掠奪集取之  
於年之保領中掠奪守  
伊東氏通符長谷川石  
見之則極井中道野  
理之上者於句後於  
先之其于野院則極井車  
申掠奪企發以之引來  
分者亦不可在相違也

一石路或石之川之月白山出之邊ヲ淨福ニテ駿州  
邊所例於其村自該邊右行者不及其後其不作子領年久  
保領之角新地也平井領菅沼織物領長沼領中長保中  
多知行國事自門和之谷分引車上之亦不可有相違事  
一棟別抄之寺中自之保云亦亦有相違並自他勅進淨土  
右之第三位大寺殿到於其邊之有永領年平般真也院雖出也

判形抄書向為附後上者一切不可之云云其後坊草者河邊進之云可加  
ト知者又仍辨 永祿二年冬三月九日 上総介判

極井寺

二海村 一古部

三白石石之平七年亥合

● 考婦アリ 人物部に就ス

カシノヤマ  
櫻山村

三白石石

三田邊路古領

古原家 城之不知 里邊云邊也 氏信御在 実名之不知

寛政年中城於於古河之御領 白雲之證アリ 自農<sup>晨</sup>に之を考ると云

斤寄 御儀のま

三七拾九石之平八年

大志ちん  
三石心ちト

官寄村

三白石石之平五年

御領

稻荷屋敷 奥平通雨谷石野物自田 道天也 志正に西子年平

吾島設樂郡市場村之末 三川水之志々也

志正年甲戌八月廿五日 田名三ノ葉 和氣島田之政 實三之自徳之女子



甲武勢之残れを<sup>茲</sup>存る

梅自能又甲武子切之内合戦在りし跡の城と号す今梅原にありし跡に在りて合戦の跡と号す

河原水古戦

奥平道玄信長弟也信長自勝自能之方也

信長信忠等より信長初自勝自能より道頼と号す其子信忠也初信忠

自勝より道用と号す其子信忠也自能より道文と号す

巻六三川水と云え 系八市場と云え

文祿己未年十月九日奉 天正元年武田ノ押上り山家

三方原作子國平信長自勝自能信長弟也信長自能信忠也

信長在敷の跡の城と号す

市原自能父子田原より其市原上六田原故より

甲別野上頼ト云六本城也

武林傳曰天正元年七月廿日之陣若本兵攻むる言長孫

城城之富家一筆形を信長信忠より信長弟守之一日味方

其処ハ自能ト云非ナリ

政大純統弟三皇は是敵矢拒守之処而移り皇武田御頼

因大陣若本軍以攻長孫城因八月下旬に後援遣軍千遠三

与重之申間風事也追馬場為信長信房率むる軍陣陣十二

山武田若本信長六屋島村率八中軍率陣陣其利在信長

其信長信忠城自能信忠信長信忠者在信長城以信長甲別

然高橋通大<sup>吉弘</sup>神官父子相傳曰何時以爲神靈終盡也  
正而高田信實遺傳於自德曰有軍旅連來其來自德  
正其密謀之偏服而即其來定後在馬谷自德曰近聞是  
下有密通志於德川家之臣之於今感之而連來至者  
何不喜乎付自德言氣面色自若言曰如授札無難  
乃若君臣父子之間親感之氣不能割其獨者若今古相  
於是左馬外翻觀心之大喜且對言以軍之密計悉皆傾覆及  
日午自德將領<sup>十</sup>作賊自城中移逃地以拒之於是不得  
止而自德信言也奔而歸 大德言自作賊<sup>甘利</sup>也其以逆  
之德故在自令收<sup>大</sup>我討敵其乃首級若干其夜以 大神君

命松平之殿<sup>取</sup>中言自德言曰老德弟<sup>自長</sup>未加<sup>以</sup>以日又平  
若老之物乃令市和事如尚我軍不是相敵故拜禱而自德  
輝陳于宮濱<sup>取</sup>以月七日甲辰其少子業路若孫子而港津干  
官得<sup>取</sup>以自德父子其言僅或曰至不能我我於村屋  
武田其以自德之能山城徑臨瀝而敵不得進若終退去  
自德退之於田中收集批我多討敵言而班軍 大神君  
聞之感激不少後自又乃接兵而多事其後言曰去德希地而  
加自德陣地自自德出軍于作賊兵我其時又討敵若干  
其後<sup>辛</sup>軍<sup>軍</sup>取討敵于馬田柳具討敵兵之云

笠園村

三石拾九石

内領

島川村

三石拾九石

日

湊尻村

三石拾九石

日

日

白字拾七石

松平長義領

三石拾九石

白田長義領

鶴果村

二葉松 寺果上り 鶴果

三石拾九石

松平長義領

上村源十郎 守光

牧平村

三石拾九石

日

白字拾七石

白田長義領

白旗七拾石七年辛未

柳領

下原文村

白旗拾石七年辛未

田原領  
松平領

大幡村 大細

白旗拾石七年辛未

田原領

白旗拾石七年辛未 田原領

上原文村

白旗拾石七年辛未

田

中宿村

白旗拾石七年辛未

七拾石

白旗拾石七年辛未

田原領  
柳領

八ツテ  
柳地村

白旗拾石七年辛未

日

八石

茂言白石谷石七斗八升

法務寺領

所領

山根村

白石谷石七斗八升

松平寺領

相模村

白石谷石七斗八升

松平寺領  
大倉澤寺領

日

九拾八石七斗八升

御倉入

白石谷石七斗八升

大倉澤寺領

瓦

白石谷石七斗八升

家忠日記云天文十六年丁未十月織田信秀松平信房村  
上杉後之長子之孫松平信房村下杉尾尾忠若孫之孫  
關五子孫平之孫重忠之孫松平信房村下杉尾尾忠若  
島子孫計之孫松平信房村下杉尾尾忠若  
所領指の御倉入之重忠信房平信希之孫一ヶ上和國三斗り御倉入  
降日乞テ之長島村三斗六之長島大信と云ク貴ノ孫之孫松平  
近自是後城ヲ拔キ其孫ノ孫ニ譲ス其初孫及ニテ重忠孫ニ

三石馬射力國ニテ廣徳君ヲ揚止所ノ判力ヲ以テ三石馬射利殺ス  
三石馬射事上和田三之臣目由平記等ニ有知地在藤野下野村等  
於廣徳君揚止所廣徳君會首ニ曰於廣徳君以テ逆統ニ爲射利  
殺スレ後六必ス其判力ヲ抜下カレカラヒト突捨テ逆統人ニ若是ヲ  
抜下ラス者ヲ揚テ呼ハレシ後六ハ彼統年等ニ殺起テ汝等射ハ  
退ク下難力凡キ有候台セシレ

于何見君ヲ揚止服各惜ニテ判力ヲ抜テ持出テ毎又於是ニ爲  
射者ヲ揚テ後十呼ハレ家々各射馬キ記合テ是等射下追下甚  
急ナリ後トイ臣重忠速退之間ニ三石馬射力後等是ヲ射下得又  
重忠是後等城ハ解ラ未テ逆統ニ爲射利殺ス由逆統廣徳君

大御感懐有テ則重忠感懐日揚リ是等賞之三石馬射利揚止  
今宵三石馬生善心カ在テ逆統人等其後等射下追下甚  
急ナル爲後等是等此カ在テ逆統人等其後等射下追下甚  
急ナル別日記カ在テ是等也

天文十六年十月廿日 廣徳御判

見平三弟及

● 柳原集之助 是石馬射  
● 三國志云永祿三年九月廿九日長門長門根城ヲ攻モリ  
門 七石馬 奉記 門三石馬 門三

城守り長徳ヲ出シ拒カシトスル処神宗淳平  
 先ニ強兵キ長徳ヲ下ニ付サシト官止テ棄担リク退ク返シ  
 相救フ其勳キ振群ニノ声死ニ見物ナリ  
 徳川家光可仰後ナセテハ誰ナラハ此約アリ其ハ柳宗淳平  
 佛トリ申ケル其日軍終ニ後今日柳宗力欲ニ早ク又官止ニ神  
 親ナキ働キナレハ今日ヨリ淳平信信ニ改集ノ助ト名示ハ下  
 仰下サレケルニ柳宗面同ヨリ施シケル  
 加茂三右衛門 牛乳云 阿部量後寺殿内因ニ子孫アリ

赤松村

三ノ宮 長徳三右衛門 長定

因

山田七右衛門 長徳  
 山田七右衛門 長定  
 山田七右衛門 長徳  
 山田七右衛門 長定

創業跡 長徳

慶長十九年十月十六日於  
 冬河路 神若ノ通リ如ク  
 子侍ニテ如儀初長徳谷  
 柳ニ長平七系ノ長定ヲ雅  
 子長福ヲ乳母養後若左  
 官以下二人携方ニテ柳駕  
 二直分テ熟材十八ノ盆ニ  
 取セテ敵ニ溜テ執シム  
 神若ハ八才ノ小兒カ貌ノ能  
 父ニ似タルヨシ致仰樹園  
 ケ系軍ノ先取最モ若例  
 也トテ仰候有テ是ヲ柳  
 駕ニ竜ノ内ニ命セヨラ今日 長徳ノ城ニ看御○波長平七系長定ハ大番次長平石見ヲ康安カ組ナリニカ龍身ト成  
 テ致仕シ食邑桑谷ニ守布ス長定遠跡ノ野士於ニ長福若ノ在スノモ不詳ノ要カ吾子ヲ長福ト名付ナリト云  
 此長福慶長二十二年ニ出生シ後ニ長火以湯ト称シ十六歳阿ニ成ニ奉リ圓井推業頭志世三濟テ新望ニ  
 大番隊ニ列スル又其組頭ト成リ或ハ長福若ノ傳臣トナル長福若早世ノ後ニ柳宗ヲ改メ  
 教有云ニ歴仕シ之稱八年甲戌五月十五日 八十八歳ニテ卒ス

萩村

高田石倉石守九年

深溝村

高田石倉石七斗七合

因

高田石

高田石倉石七斗七合

高田石倉石七斗七合

創業録 高田石倉石七斗七合 柳村好景 高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合

創業不係 永祿六年 九月大天神若宝依郡保 備城二府御城之松平之致 外伊志奈食意ス十時長氏 城衛ヲ令セラル

同古八巻 慶長十九年九月十九日 神若直長板倉君内膳三量 昌伊守房 友州保備ノ 地中五百石加恩ニシテ

高海誘二

松平信集

高海誘二 松平信集 高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合

高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合

高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合

高田城

松平又八年志定 高田城 高田石倉石七斗七合

家忠日記云志定初之云高田石倉石七斗七合

高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合 高田石倉石七斗七合





内津子池く小茨川の城  
とありゆき長二年二月  
伊保と揚て再果代相  
傳の地と存す 石田九年  
夏叙爵一十七年十月  
十九年石田の城と揚て  
三方の利ありと存九弟忠  
一とて將軍の命は下す  
大坂の去再を討つ時  
小川らハ新軍の軍  
いふより再々草の事  
ありしは忠一將軍の  
は傳ててついであり  
一とて幸多しは忠一  
とて又揚てついであり  
やといひつらう云月七の  
我ひはハ一に多うハ  
すせいとんけしし 手  
少く討死をてそけし  
名物なりとて一とあり  
たふしきくふきハ城  
とてそ大橋とあり

一揆ヲ企テ三石額田郡野村ノ古墨ニ依テ推シテ大津若ノ  
會ヲ奉テ伊保及之其墨ニ陷ニ城ヲ長岡ノ弟島村ヲ擣テ之  
全馬ハ伊保ニ降ル身大津若降城ニ渡御有テ倉倉鷹ヲ  
伊保ニ揚て且ツ會有テ曰長兵城ハ要害地ニ敵境下相接テ  
武田六ハ是ヲ都テ保テ六書付テ汝欲之今汝城ヲ守テ武田力  
勢ヲ拒ム申者探テ汝吏ニ是ニ當リ者乃仕テ其地ヲ守ル  
ハキト慎ニ是士林ノ面目也伊保令ニ信テ而曰長兵城ニ封  
テ是ヲ御テ抗ラシ深溝ノ城ニ取ルテ乙亥武田勝頼  
大軍ヲ以テ之別長兵城ヲ圍ム 大津若及之信長自ラ兵  
ヲ率テ是ヲ將テ酒井忠次及伊保助命ヲ奉テ其墨山ニ赴ク  
名物なりとて一とあり 石田九年八月十日長湯表下知状より揚り  
たふしきくふきハ城也 石田九年八月十日長湯表下知状より揚り  
たふしきくふきハ城也

元年七月十四日小茨川の城  
六月八日肥前國高橋の城  
本家の傳ハ本家の日記  
世に傳ふるハ本家の日記  
とてそ大橋とあり

石田九年八月十日長湯表下知状より揚り  
たふしきくふきハ城也 石田九年八月十日長湯表下知状より揚り  
たふしきくふきハ城也

名ヲ揚テハ不知トシテ士卒ヲ分テ各志ニ附テ其自ラ死ス  
室ノ麻毛切テ肴肉ニ擬シテ酒ヲ初テ父子相分レ伊保等  
到テ九月一日之巻ニ進テ武田力多勢ヲ破リ終戦ス 于時  
月日叙分家忠 深溝城ニ居テ三河ニ業ヲ服シハ不審

家忠日記曰大津若奉仕ス云云石田所ト後長兵城ヲ遠  
近ニ役征征系中山越川ニ至神井長湯波抄田津達自持舟  
軍者我功有テ多ク首ヲ得たり

日五年壬午相州小山栗甲州ヲ侵ス大津若師ヲ帥テ是ヲ拒ミ

北村家忠或ハ自ら依吾下ノ敵ヲ討取ル自漢者トノ機ヲ見テ  
進テ相殺ス海ニ甲陽ヲ神君トシテ

日十一年甲申大御君秀吉下無事備ト其内家忠危在火山  
表空向テ相見樂田田長也也放力ニ森長一カ陣ヲ破テ  
首級得

日十三年乙酉長治城代石川伯耆守好忠志ヲ圖シ後ニ長治  
ヲ降テ去ル是ニ依テ其地降勅久家忠深備ニ在テ是ヲ圖志  
ニ地仕テ是ヲ領ム大御官家忠ヲ速成ノ功ヲ御感有テ是ヲ褒  
賜

日十一年庚寅秀吉公相取北軍ヲ征伐シテ軍ヲ東國ニ發シテ

小田原ノ城ヲ圍ム

大御君モ是ヲ援テ五月廿一日ノ夜井伊止政村平康重等ノ篇ニ  
討テ小田原ノ城ヲ降曲降ヲ不意攻ム味方陣中御馬ヲ墜ル家忠  
独リ地句ヲ是ヲ見テ急ニ逃レ其子細ヲ名取ニ遣ス是ニ依テ  
陣中群動靜ノ家忠能ク察スルテ大御君方ニ感テ其後  
大御君関ノ言ヲ領シテ其時ハ其志深清為シ其後城ニ在ラ  
其ノ度長久平房子上杉景勝大御君ニ致テリ修信トシ  
大御君而シテ東國ノ部キ其時ハ杉年亦亦再之志内家  
長杉年進心為シ其令ヲ為リテ伏見ニ留テ城ヲ守ル既シテ  
右旗進テ野原山ノ釣見時ニ石田三成軍進シテ七月十八日

十万余部多率之彼地之城之困公家忠之患下儀之兵多出之  
 城和之控之島津力兵下相獲之又城中ニ今堂ヲ御守見  
 日晦日ノ夜ニ入江カノ作人俾尾其歌ノ為ニ内志ノ形カ  
 焚ク敵是ニ棄メ城ヲ競ヒ攻ム日辰刻ニ及ニテ治儀  
 城中ニ攻入ル家重其系ノ獲ヲ看眺ノ甲ヲ為リ思儀儀  
 此所ノ名劔利カヲ第ニ士率ヲ指揮ノ自落ヲ提テ空テ  
 出力殺スル一三に左ノ眼ニ射シ死リ其直ヲ進ニ奉ル敵  
 ヲ後軍ヲ以テ御守キ和曰將遂自殺ス千村家忠曰十六集

○和泉守信光

元芳

弁弥三郎 俊外記 五井三任  
 以五井称号トス

元心 五井太郎左門  
 五井ノ家督

忠景 主殿  
 又八郎

忠定 主殿  
 大炊

伊忠 主殿  
 又八郎

家忠 主殿  
 又八郎

好景 主殿  
 大炊

忠利 主殿  
 俊從五位 主殿頭  
 其家督ヲ継テ忠誠ニ任ス天下  
 一統ノ後三州西脚一石ヲ揚フ  
 慶長十七子二月十日在田城  
 三万石ヲ揚定永九年三月八  
 月 日在田ヲ揚ニ肥前修平城  
 七万石ヲ揚曰品ニ任ス

景定 十郎右門

定清

太師左門

好之

久大夫

景行

新八郎 以上  
四兄下同討死

忠行

庄九郎台徳公奉仕  
忠隆卜家督ヲ續

忠冬

手左門尉 慶安被召出別  
菜地ヲ賜 是家忠日記作者也

忠一

庄九郎台徳院奉仕元和元年卯  
大坂再乱寸忠一麾下供奉大  
坂三赴吾先登之祖父忠死ヲ相  
続ヘシト五月

忠隆

兵庫頭台徳公奉仕一戰死又嗣子  
依釣命其家相續ス  
叙從五位下

忠房

主殿頭 大炊頭 家督  
自是如武鑑

